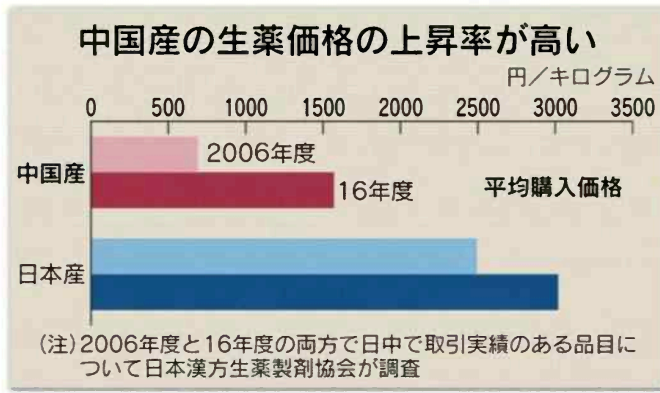
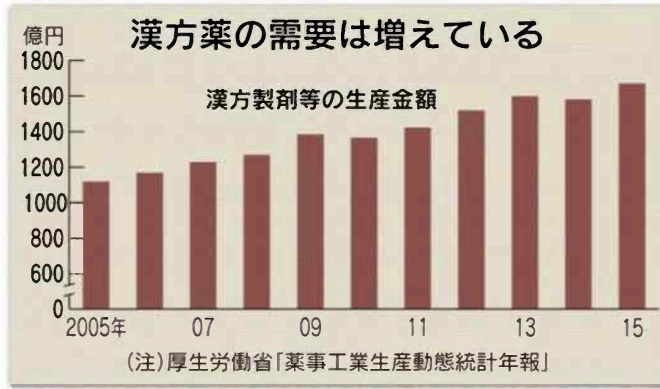


漢方なら日本 中国に効く

生薬を国産でまかなう動きが進む



ツムラは国内に調達先を広げている

契約農家の皆越さん

縮む価格差、増産に追い風

導をしたり、農機や加工機械を貸し出したりして生薬栽培の専門家がいる。担当者は年に数回、農家に派遣している。収穫地を訪れ「そろそろ収穫したキキョウの加工に備えよう」と指導する。あさぎり町の農家の提案を受けて、土にシートをかぶせて生産する独自の栽培方法を考案したこともある。

なぜ生薬を日本国内でまかなおうとするのか。健康に強い関心を持つ高齢者の人口に占める比率が高まり、漢方薬の国内需要が高まっていることが理由だ。だが、他のメーカーを取材すると別の理由が浮かび上がってくる。

「生薬も日本国内で調達できれば、メイド・イン・ジャパンを強く訴えられる」。龍角散（東京・千代田）の藤井隆太社長は力を込める。

龍角散はのど薬「龍角散タレント」などに使うキキョウを中国産から秋田県産に切り替え始めた。まだ量は少ないが、日本産の生薬が欲しいという香港の漢方薬メーカーもいる。国産生薬の需要は増えそうだ」（藤井社長）。

龍角散は東京生薬協会（東京・千代田）と連携して生薬栽培の専門家を農家に派遣している。収穫したキキョウの加工についても、人手ではなく、ごぼうの皮むき機を使うように助言して農家の負担を減らしている。

漢方薬のルーツは中国だが、中国の消費者は自国の製品をあまり信頼していないと言われる。そのため、日本を訪れる中国人観光客の間で龍角散やツムラなどの日本製の漢方薬・生薬製剤の人気が高い。

中国のインターネットサイトや観光ガイドでは、日本製の漢方薬・生薬製剤が紹介されている。製造元だけでなく、原材料の生薬も日本産であれば、威光も高まるというわけだ。

物価がなかなか上がらない日本とは対照的に、経済発展が著しい中国では物価上昇のペースも速い。それは漢方薬原料でも例外ではない。

日本漢方生薬製剤協会（東京・中央）が漢方薬原料の生薬の平均購入価格を比べたところ、国内産は06年度に1キログラムあたり2494円だったのが16年度に3019円に上がった。一方、中国産は06年度の690円が16年度に約2・3倍の1570円に跳ね上がった。

国内産の価格は中国産の約2倍とまだ中国からの輸入の方が安い。それでも武田薬品工業子会社でも武田コンシューマーヘルスケア（東京・千代田）の一部門だった1956年から生薬のダイオウの栽培に取り組んできた。99年以降は「信州大薬」肥満改善や代謝アップにつながる「ラシエールディングス」は2017年4月から女性誌「an・a」に漢方薬の広告を掲げようとして、13年度からは、農林水産省や日本漢方生薬製剤協会が中心となり、全国で薬用植物を育てたい農家と企業をマッチングする相談会も開かれている。（西岡杏）

生薬を国産化 訪日客に人気

中国にルーツを持ち日本で独自に発展してきた漢方薬。中国頼みだったこの原料（生薬）を日本国内でまかなおうとする取り組みが進んでいる。背景には、国内需要の伸びに加え、年間で700万人を超える訪日中国人の存在がある。

越直樹さん（33）は「生薬（ヒニールハウスの初期投資が少なく、中国産は8割、日本産が15%を占める。比率はあまり変わらないものの、国産の調達量は2016年度には06年度比で4割増えしており、同社が使う生薬約120種類のうち国産は約30種類を占める」。

契約農家を指導

国内の医療用漢方薬のシェア8割を握るツムラは、生薬の調達先を国内で広げている。あさぎり町のほかに、北海道夕張市や高知県越知町など主に全国6カ所から原料の生薬を仕入れている。農家に栽培方法の指導をしたり、農機や加工機械を貸し出したりして生薬栽培の専門家がいる。担当者は年に数回、農家に派遣している。収穫地を訪れ「そろそろ収穫したキキョウの加工に備えよう」と指導する。あさぎり町の農家の提案を受けて、土にシートをかぶせて生産する独自の栽培方法を考案したこともある。

鹿児島空港から車で1時間半、草原のような畑が見えてくる。9月になると、花が咲き、まるで黄色いじゅうたんのように見えるという。合同会社「あさぎり薬草（熊本県あさぎり町）」のミシマは現在約64畝の畑でミシマ

生薬は中国産が8割

(2014年度、合計2万5419トン)



を安定的に含むように自社で改良した都甘草（みやまかんぞう）を14年市場で先に買い占められ、若い人たちの間でも漢方薬の需要が拡大している。（クラシエHD）

最近が高齢者だけでなく、若い人たちの間でも漢方薬の需要が拡大している。調査会社のアイ・エム・エス・ジャパン（東京・港）によると、16年度の医療用漢方薬の市場規模は薬価ベースで1481億円になり、06年度比で56%増えた。

農家にとっても、安定した売れ行きが見込める生薬の栽培は大きなメリットがある。企業と農家のそれぞれのニーズを結びつけようと、13年度からは、農林水産省や日本漢方生薬製剤協会が中心となり、全国で薬用植物を育てたい農家と企業をマッチングする相談会も開かれている。（西岡杏）

国内産の価格は中国産の約2倍とまだ中国からの輸入の方が安い。それでも武田薬品工業子会社でも武田コンシューマーヘルスケア（東京・千代田）の一部門だった1956年から生薬のダイオウの栽培に取り組んできた。99年以降は「信州大薬」肥満改善や代謝アップにつながる「ラシエールディングス」は2017年4月から女性誌「an・a」に漢方薬の広告を掲げようとして、13年度からは、農林水産省や日本漢方生薬製剤協会が中心となり、全国で薬用植物を育てたい農家と企業をマッチングする相談会も開かれている。（西岡杏）